

(訳者コメント)

漢和防務評論ネット版に、今月から投稿記事も掲載されます。  
投稿記事の内容は掲載前に漢和の編集部で精査されるので、相応の信憑性があるものと思います。  
今日の記事は弾道ミサイルの命中精度が中国独自の衛星航法システム”北斗”を使って大幅に向上したとの記事です。

\*\*\*\*\*

標題「中国ロケット軍がミサイルの命中精度を高める」

作者：劉文濤洛杉磯

総編集こんにちは！漢和情報誌は、かつて中国ロケット軍の短距離戦術ミサイル（中国軍内では戦役戦術ミサイルと称する）の命中精度が大幅に向上したとの記事を掲載した。その中で、DF-15 シリーズはレーダー画像誘導システム（本誌編集者註：本誌が報道したのは DF-21 シリーズで、DF-15 シリーズではない）を導入した可能性がある、と述べた。しかし作者の研究によると、現在、命中精度を高めた主要な手段は、依然として衛星誘導である。特に北斗システムを利用している。

例えば、私が知るところでは：北斗 1 号が運行開始後、中国ロケット軍は北斗航法システムを開発し、この北斗 1 号システムを利用した通常弾頭の”倒北斗”システムを開発した。この名称は漢和でも報道されたことがあるが、あまり深くは触れていない。実際は、この誘導方式を採用することによって、DF シリーズの戦役戦術ミサイルの命中精度は数百メートルから 30-50 メートル以内になり、ミサイルの航跡の可視化が実現した。例えば、DF-15 甲（軍内名称及び漢和名称：DF-15A）を例にとると、重要な空軍基地を 1 個破壊するのに、”倒北斗”を組み合わせた誘導方式を採用すると、慣性誘導を採用した誘導方式に比べ、弾量が 7-8 発節約できる。

しかしこれは暫定的な手段であって、現在は北斗 2 号システムが運行しており、このシステムが DF シリーズミサイルに採用され、このほか、砲兵部隊の長距離ロケット砲に北斗 2 号誘導モジュールが取り付けられると、砲弾の命中精度は数百メートルから 20 余メートルに縮小する。海軍の空母、空軍爆撃機及び誘導爆弾、東風シリーズミサイルにすでに北斗 2 号のターミナル誘導航法システムが試験的に取り付けられており、成果は良好である。

\*\*\*\*\*

漢和編集部編集者註：この作者の投稿に注意して欲しい。接触した間に、本誌

はこの作者が多くの真実のニュースを知っていることがわかった。したがって信頼できるニュースとして掲載した。一部の意見は本誌を代表するものではないが、極めて高い価値がある。今後このような投稿記事を掲載する。

以上